

ハンガリー動乱50年:動乱を招いた暗黒時代(その5) —社会民主党出身者の粛清

盛田 常夫

ライク・ラースロー処刑でスターリンのさらなる信頼を得たラーコシは、ハンガリーにソ連と同じ個人独裁型支配体制を構築する道を選んだ。1950年初頭からスターリンの死去（1953年）にいたるまで、ハンガリーではラーコシ独裁を確立する内部粛清の嵐が吹き荒れることになった。その背景には冷戦体制突入の危機感から、東欧圏のソ連への同化による社会主義体制の維持・強化という歴史的な力が働いていた。

歴史的背景

米ソ冷戦激化の最中にユーゴスラビアがソ連圏から離脱したことは、社会主義への許し難い裏切りであり、中・東欧諸国がユーゴスラビアの二の舞になることだけは絶対に避けなければならなかった。そのために、ユーゴスラビアにたいするイデオロギー的批判攻勢が強められ、東欧圏における親ユーゴスラビア勢力を徹底排除することが求められた。ライク処刑直後にハンガリー（ジュラテトゥー）で開催されたコムンフォルムの大会は、ユーゴスラビア批判を国際戦線にまで高めるものだった。まさにライク処刑はユーゴスラビアの同調者にたいする最初の見せしめ事件であった。ソ連圏内部の統制を維持するために、存在しない事件をでっち上げてでも、イデオロギー的な統一を図ることが必要だったのである。それを実行したラーコシはスターリンとソ連共産党の保守派指導者からさらに厚い信頼を得ることになった。

1950年6月の朝鮮戦争開戦に至るまで、ソ連指導部は対ユーゴスラビア侵攻を一つのシナリオとして描いていたと思われる。このシナリオが実行されれば、ユーゴスラビアと国境を接するハンガリーとブルガリアは、ソ連・東欧軍侵攻の矢面に立たなくてはならない。ユーゴスラビアへの親近感が強いハンガリーがユーゴスラビ

アへの侵攻を躊躇することがあってはならない。そのために、「ユーゴスラビア修正主義者に犯されたアメリカ帝国主義のスパイ」というレッテル貼りは、単純なイデオロギー闘争には不可欠のスローガンだった。ただ、朝鮮戦争における米軍の素早い反撃を目の当たりにして、ユーゴスラビア侵攻のシナリオは後景に退いた。

それに代わって、「共産党内部に潜むユーゴスラビア修正主義、アメリカのスパイ摘発」という内向きの闘いが、ソ連共産党とラーコシ一派の主要な「闘争目標」になった。ハンガリーでそのイデオロギー闘争の標的になったのは社会民主党出身の大物政治家であり、チェコではスランスキー共産党書記長であった。

ハンガリーの事情

第二次大戦中のハンガリーでは非合法のハンガリー共産党の影響力は小さく、それにたいして合法政党であった社会民主党は大衆的な影響力を維持していた。このため、戦後の政治体制確立過程において、ソ連に後押しされているとはいえ、共産党は社会民主党とその政治家を無視するわけにはいかなかった。

1948年6月、共産党と社会民主党が合同してハンガリー勤労者党が誕生したが、その政治局員14名のうち、5名が社会民主党、9名が共産党の出身者で占められた。なかでも社会民主党出身のサカシッチ・アルパードは、ハンガリーの対外的な顔となる最高幹部会議長に選ばれた。同じく政治局員に選出された社会民主党出身のマロシャン・ジョルジュは、共産党との合同に乗り気でなかったサカシッチと異なり、社共合同に積極的で、軽工業大臣のポストに就いた。さらに、政治局員ではないが、やはり社会民主党出身の中央指導委員のりリース・イシュトヴァーンは法務大臣のポストに就いた。これら社会

民主党出身の重鎮たちが、ラーコシによる粛清の標的になったのである。

サカシッチ逮捕

1950年4月24日、12区のローラント通りにあるラーコシの私邸に、4人組に加えて、カーダール、サカシッチ、ピーテル・ガーボルが招集された。ラーコシの指示によって前日にラーコシ邸に盗聴マイクを敷設したファルカシュ・ヴラジミールがこの集まりを詳しく証言している（Farkas Vadimir, Nincs mentség, Budapest, 1990）。この会合で、ラーコシはサカシッチが1930年代の建設労働組合の幹部時代に、警察と接触したことを理由に「ホルティ政権の政治警察のスパイ」だと決めつけたのである。ラーコシは自ら口述し、サカシッチに二つの文書を自筆で作成させた。一つは「政治警察のスパイであった」という自白書であり、もう一つは「最高幹部会議議長を辞める」という辞表である。

ラーコシ夫妻はサカシッチの娘であるクララとは家族付き合いしていたが、サカシッチ夫妻の軟禁から逮捕・監禁に伴い、クララの夫で社会民主党出身の中央委員であったシッフアー・パールも逮捕した。サカシッチは丁重に扱われたが、夫人は獄死した。他方、シッフアーには拷問が加えられた。

印刷工出身の社会民主党員で、後にカーダール政権の経済改革を主導したニエルシュ・レジューは、サカシッチ逮捕の際にラーコシが手にしていた政治警察との関係を示す書類は偽造されたものと証言している。

一斉検挙

サカシッチ逮捕から小物の逮捕が続いたが、7月から8月にかけて、社会民主党出身の大物政治家が一斉に逮捕・監禁された。軽工業大臣マロシヤン・ジョルジュ、法務大臣リース・イシュトヴァーン、中央委員で経済学者のヴァイダ・イムレが逮捕され、ÁHVの若い取調官がこれらの政治家の聴取に当てられた。センディ・ジョルジュはマロシヤンとシッフアーを担当し、リ

ースを担当したのはバウエル・ミクローシュである。センディはバウエル・タマーシュの叔父にあたり、ミクローシュは父にあたる。バウエル・タマーシュの母もまた当時、ÁHV職員として働いていた。彼等はÁHVでも一目置かれる有能な職員であった。まさに、バウエルの家族は、ÁHV一家でもあった。

センディもバウエルも知的でかつ洗練された青年だという評判はあったが、センディは非常に攻撃的な性格の持ち主で、ラーコシの指示もあって容疑を否定するシッフアーに容赦ない拷問を加えたと言われている。バウエルはセンディほどに攻撃的ではなかったが、リース法務大臣の取り調べにあたって、天井に吊したバケツからリースの頭部に水を垂れ流し続けるという拷問手法をとった。当時、彼の上司であったファルカシュ・ヴラジミールがこれを問いつめたところ、「古代中国から使われている有効な手法」だと自らの博識を披露したという。ファルカシュはバウエルの妻ユーディットにもこのことを伝え、このような拷問を止めるように二人でバウエルを説得したと記している。

ところが、56年動乱以後にファルカシュ・ヴラジミールがÁHV時代の罪を問われた際に、バウエルの妻は当時の状況を全面的に否定し、夫の無実を主張した。以後、バウエル家ではÁHV時代の犯罪はなかったものになり、息子バウエル・タマーシュもまた、父は取調官であったことはないとまで国会で主張している。

マロシヤン・ジョルジュ等たちはこの年の暮れに死刑判決を受け、すぐに終身刑に減刑されたが、1956年3月まで監獄生活を続けた。マロシヤンはその後カーダールの側近として、1962年にラーコシ時代の調査をとりまとめた中央委員会において、「爪はがしのバウエル」という表現でバウエル等の若い取調官たちを批判した。

リース・イシュトヴァーンは1950年9月15日の取り調べにおいて頭部を強打され、そのまま息を引き取った。誰が死に至る拷問を加えたのかは、明らかにされていない。

（関連記事は、<http://morita.tateyama.hu>を参照されたい）